出る杭研究

オオサンショウウオでみられた輪ゴム症候群の事例

オオサンショウウオ保全と社会の課題～ハンザキプロジェクト2024～

参加学生：西潟晃汰　濱田孝太　堀涼香　向山陸　担当教員：松井久実

研究の背景と目的

野外調査を通じてオオサンショウウオの生態や魅力に触れ、オオサンショウウオの生活圏における地域社会の課題、オオサンショウウオのと野生動物との関わり、地域の未来について考え、アクションプランを立案する課題解決プロジェクトである。

オオサンショウウオは、特別天然記念物であり、保全を推進すべき存在である。しかし、オオサンショウウオの生息域での人口減少の課題がある。生息域で里山が保たれ、また豊富な餌資源が維持する必要がある。人とオオサンショウウオが共存するためにアクションプランを前世代間で検討する必要がある。



図1：捕獲した個体

研究・調査方法

島根県邑智郡美郷町内の江の川支流上流域において、夜間生態調査を実施した。捕獲個体については、体重、全長、頭胴長、頭幅、尾長、尾高の測定を行うとともに外部形態の撮影、個体の外傷や指の欠損の有無など生態状態を確認した。また、超音波診断装置(エコー)を用いて体内器官の情報と雌雄を測定した。個体識別を行うため、マイクロチップリーダーを用いて新規個体か再捕獲個体かを確認し、新規個体であった場合は、継続的な調査を目的として肩甲部にマイクロチップを埋め込んだ。全ての測定作業の完了後、捕獲地点へと再放流を行った。



図2：腰部の様子

結果と考察

捕獲した個体のうち一個体に、頭側側の後肢基部、腰部を一周する白い一様のラインが確認された(図1)。患部を観察すると白いバンドのようなものが食い込んでおり(図2)、患部に触れると大きな反応が見られた。外科用ハサミである眼科剪刀でバンドを切断したところ、皮膚は真皮まで一周断裂しており、筋層が露出していた(図3)。出血はほぼ見られなかった。調査区域内では人里に隣接する河川部を中心に、生活ごみが目立っていた。除去されたバンドは直径約4cm、一般的にも入手可能な輪ゴムのようなものであった(図4)。バンドは一部劣化が見られた為、長時間装着されていたことが予測される。また、装着した詳細は不明であるが、人為性も予測される。以上は両生類で初めて見つかった輪ゴム症候群の事例として、日本オオサンショウウオの会 全国大会（2025年10月19日 名張市）で口頭発表した。



図3：除去時の様子



図4：除去されたバンド

これから

本研究の保全活動において確認された輪ゴム絞扼症の個体は、人為的廃棄物が野生生物に対して直接的かつ深刻な影響を及ぼしていることを示す重要な事例である。今後は、当該個体の継続的な経過観察を実施し、同様の被害を防ぐために地域周辺のモニタリング体制の強化、原因となるごみの削減対策を進める必要がある。加えて、地域社会における環境意識の向上と、継続的な保全活動の推進に貢献していきたい。



図5: 発表の様子